

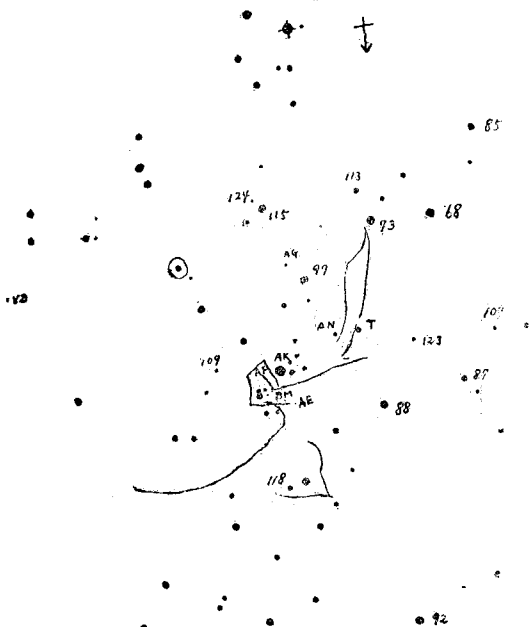
10.8等の星は3時で普通の夜に見えるが11.3等は可なり困難である。両星とも變光星と考へられて居る。

此の星雲の内外には甚だ變光星が多い何れも淡いものばかりであつてハーヴァード天文臺及びウォルフ氏の發見である。其の内でも Tは1863年 Bond の發見した不規則星 あり。圖はホフメイスター及びハーゲン兩氏の原圖に基いて書いたもので光度はハーヴァード光度表よりとつた。

A N はハーヴァード表には11.4等とされて居るがハルワイヒの表には10.3—11.0等まで變光するが種類不明である。圖で BM は四重星の左下、右下は誤。

星名	變光寫眞光度	種類
AK	10.7等—11.3等	不明
AF	11.9—16.1	同
AE	12.6—13.3	同
AG	12.9—14.0	同
VZ	—	—

オリオン星雲



古き新星の最近状況

古き新星の光度観測は新星研究上重要なものであるが少数なる観測が得られるのみにて一般に等閑視されて居る。

英のステアプンソン W. H. Greavenson (六吋レイ望遠鏡) 氏やキース天文臺のバーナード氏 (四十吋) A A V S O 會員等の観測が主要なるものである。ステアプンソンの観測を主要なるものとして記す。

○1866年北冠座新星

9.4等の光度を保持す。

1848年蛇座新星

1922年中11.9乃至12.7等の間に稍々週期的に變光す 1918年鷲座新星1922年中は殆んど變光せず10.1等なれど1923年に10.4等近くまで落下せり。可なり著しき星雲狀星像を有する爲観測は多少不一致なり。2時にて観測可能。

○1919年蛇座新星

AAVSO 會員の観測によれば1922年中12.0等より12.8等まで下降す。

○1920年白鳥座新星

1922年中10.0等より11.2等まで漸次に下降し1923年10月には11.5等なり。星像星雲狀なる爲に光度決定に著しき困難を感じ著しく不一致なり。3時にて観測可能。

○1876年白鳥座新星

光度約14.7等にて6時にては最良の夜に於てのみ認め得。變光は僅かに0.3等以内に於てターナー教授は41.5日の週期を與ふ。

○1910年トカゲ座新星

認め得べき變化なく14.1等なり

○1901年ペルセウス座新星

12.2等より14.1等の間に著しき變光をなし星像は僅かに73倍にて著しき星雲狀の外観を有し観測多少困難なり7時にて容易に観測さる。

訂正

一月號天界口繪のクロスレー反射望遠鏡の説明中36吋鏡はカルバーの製作なりと記せしがキラー氏の原文には It Was made by Mr. Calver と記し其後 Campbell 氏により天體物理學雜誌1902年號によりて訂正さる。

反射鏡面が不完全なりし爲有名なクラップ氏 Sir Howard Grubb をして再度拋物鏡面に磨かしめたる故クラップ氏の製作と同様なりと。又鏡面は甚だ完全にしてフーコーの鏡の試験によれば鏡面は甚だ良好なり。以上の理由により訂正す。